学校の怪談

元気な檸檬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
学校の怪談

【Ｎコード】
Ｎ６７２５Ｉ

【作者名】
元気な檸檬

【あらすじ】
大学仲間と弟と温泉旅行に行くはずが、道に迷って着いた学校。
これからいったい何が起こるのか？
俺たちはまだ知らなかった。

真木　昭吾編　～その１～

俺は、真木（まきしょうご）　昭吾、大学４年生で来年の春からは晴れての社会人だ。　ちなみに容姿も頭も性格も、いたって普通の人間だと俺は思っている。　そんな俺は、大学仲間と弟の５人で山道を走っている車の中でダベっていた。

「おい、真木ぃ～？　本当にこの道でいいのか？　結構たつのにまだ旅館みえてこないぞ？」

そう愚痴をこぼしながらも、男の表情は楽しそうだった。

無理もない。　俺たちは大学４年の最後の思い出作り兼、４人全員就職決定祝賀会と称して休日である今日温泉旅行に向かっている最中なのだから。（一人関係ない者もいるが・・・）

「う～ん、おかしいなあ？　さっきあった道案内の看板には、あと１キロと書いてあったからもうとっくに見えているはずなんだけど？」

と、俺は車の運転手　鵜野（うのとうや）　藤也に返事を返した。

「もしかして、迷ったんじゃない？」

俺の助手席側後部にいる少し小柄な女性　水埼（みずさきなな）　奈菜が誰もが思う疑問を言った。

「一応ずっと道なりにしか進んでないから、そんなはずはないんだけど・・・。」

「ああ、兄貴が言っているのは正しい。　あの道案内があったところ以外はずっと道なりだった。」

運転席側後部座席の弟の真木（まきりゅうき）竜輝も言ったとおり、道案内があったところ以外分かれ道などなかったのだから迷いようがない。もっとも、道案内自体が間違っていたのならどうしようもないのだが・・・。

「じゅあ、誰かにこの道で合っているのかどうかだけでも聞いてみましょうよ。」

「おいおい、こんな山道に人なんていないよ。　だいたい、一軒も民家なんて運転中に見なかったぞ。」

後部座席の真ん中に座っている眼鏡をかけている女性　南（みなみらん）蘭が打開策として提案するも、鵜野の言葉によってそれが否定されることになると思ったのだが、

「あれ？　見て、あそこ！　明かりが見えるよ！　人がいるんじゃない？」

水埼のおかげで否定されることはなかった。

水埼の指す指の先には、確かに明かりが見えていた。　「旅館か？」っと、ちょっと期待をしていたのだが、近づくにつれてそれが

木造４階立ての立派な学校だとわかった。

「先生でもいるのかしら？」

「こんな休日にか？」

「今先生って職業は、休日でも学校にることが多いと聞いたことがある。」

などと、思い思いのことを話している間に車は学校のグランドへと停車した。

「悪いんだけど、俺運転で疲れちまった。　お前らが道を聞いている間にちょっと休憩するわ。」

「ＯＫわかった。　じゃあ、行ってくるわ。」

「兄貴、俺も行く。」

「わたしも、わたしも～。　南も一緒に行こ。」

「えっ、ええ。　わかったわ。」

そんな会話を聞きつつ、「じゃっ、よっろしくぅ～♪」といいながら、鵜野は座席を倒して横になった。

真木　昭吾編　～その1～（後書き）

初めての小説投稿、ドッキドキでございます。
一応見直しては見ているものの、なにぶん国語力がいまいちなので誤字・脱字、漢字（変換）間違いや文法的指摘などおかしいところがあればじゃんじゃん指摘ください。
そして、読んでくださった読者様ありがとうございました。

真木　昭吾編　～その２～

車を降り、ゆっくりと深呼吸してみた。

今までずっと車の中の篭った空気を吸っていた分、山の透き通った空気が体に入ってくる感じはなんともいえない幸福感だ。

「しっかし、まだ昼間なのに暗いなあ。」

今の時間は十二時十分前後にもかかわらず、俺たちのいるこの場所は本当に暗かった。

周りの木々たちが太陽からの日光を一切受けつけず、まるで夜のようで時計の方が狂っているのではないかと錯覚されるほどだ。

それにしても、よくこんな暗い所に学校を作ったもんだと少し呆れてくる。　こんなのでは、教育を受けさせる施設としては全くというほど機能しそうにもないのに。

「早めに道を聞いて、さっさと旅館へ行こう。　じゃないと、暗くなって何にも見えなくなる。」

この暗さでは、弟の言っていることはもっともな意見だ。

「それじゃあ、あそこの明かりが点いている部屋に行こう。」

「え、ええ。」　「うん！」　「わかった。」　俺の掛け声に、三人とも頷いた。

この学校に入ってから、俺は少々辟易していた。

ギシィ～　ギシィ～　ギシィ～

まず一つ目の原因は、この音。　木の床が古いようで、俺たちが一歩歩くたびに床の板が軋む音が鳴り、４人もいるのでうるさくてたまらない。

二つ目の原因は音だけではなく、この学校は臭いもあまりよいものではないこと。　学校に入る前は木の独特の良い香りが香ってくると思っていたのだが、中に入った途端、カビ臭い臭いが漂ってきた。　別に身体に悪影響が与えるほどの強烈な臭いではないのだが、あまりいい気はしない。

「この学校そうとう古いな・・・。」

外の暗さによって外見から古いと判断できなかったが、学校の中に入って、ようやく俺たちはこの学校の古さを実感していた。

「でも、なんだか懐かしい感じがするよね～。　別にここの学校通ってたわけじゃないけど、ドアや窓まで木でできているところとかなんだか不思議。」

確かに俺たちが通っていた学校の構造は鉄鋼やコンクリートがほとんどで、少々寒々しい感じがするのが当たり前のように思っていたのだが、この学校の木造であるが故の暖かい雰囲気が懐かしいと

思うのかもしれない。

それに、昔はこの学校もマイナス面である音も臭いもこんなには酷くなかったと想像するとなおさらである。

「たぶん、外から見えていた、明かりが点いていた部屋はここみたいね。」

そんなことを考えているうちに、俺たちは目的についたようだ。確かにガラス越しに中の明かりが木漏れ出ていることから、この部屋に間違いはなさそうだった。

「すいません。　だれかいらっしゃいませんか？」

言いながら木でできたドアをガラッと開けると、うっすらとした明かりが強くなり一瞬まぶしく感じられた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6725i/

学校の怪談

2010年10月21日22時14分発行